

鳥居正文先生を送る

西村哲一

鳥居正文先生が今年度、2016年度末をもって本学専任教員の職を退任なさる。本学に奉職なさったのが1982年のことであるから、在職期間は35年に及ぶ。本フランス文学科が鳥居先生の最初の、そして最後の職場であった。文字通り、教員としてのキャリアのすべてを本学科に捧げてくださったことになる。私自身はそのうち25年間を共にさせていただいただけなのだが、顧みれば私にとってのフランス文学科には、いつもそこに鳥居先生がいらしかった。そして誠に厚情あふるるお付き合いを頂いた。この文を草するにあたってまず心に浮かぶのはそのことである。そうしたお付き合いのなかから、幾葉かのスケッチを試みさせていただきたい。なお以下では、普段から呼び慣れているように、鳥居さんと記させていただく。

鳥居さんの35年間の在職期間中に、本学科を「通り抜けていった」学生諸君はおよそ4,000人ほどになるだろうか。鳥居さんはこの、若い人たちの滔々たる流れを、常にその全体にわたって、平静な目でくまなく見ていらしかった。そしてそこに惜しみなくご自身のフランス語教育への熱意を注がれた。この若い人の流れこそは我々の学科と一般社会との絆の一番の証である。この流れの細ることがあれば、それは本学科に寄せる社会の信任が揺らいだことを意味するのだから。勿論、これだけの数の学生諸君の皆が皆、専門的なフランス語研究者やフランス文学研究者を志す訳ではない。それは見やすい道理で、どの大学のどの学部どの学科でも同じことなのだが、しかしこと本学のフランス文学科に関しては、実は微妙な調査結果もある。この若い諸君が、実際に入学した後の本学科に対する満足度は、文学部の他学科を圧して高いのだが、その選択が第一志望だった学生や、友人や知人に本学科を勧める学生の割合は他学科よりも相対的に低いのだ。プラクティカルには英語の支配が圧倒的な今の日本社会の只中で、フランス文学科を選択することに伴う地政学的な問題がここには表れていて、これは一朝一夕にどうできることでもない。鳥居さんは

こうしたことも含めた様々な「事情」をすべて静かにのみこんだ上で、しかし現にそこにいる若い人たちの上には、常に教育の熱意を注がれた。それに惹かれて近づいてくる、志のある学生には特に熱心に。ただし、いかにも鳥居さん流の、少しも押し付けがましいところがなくて、決して笑みを絶やすことがないのに、無尽蔵に忍耐強くて、自分にはどこまででも君と一緒に行ってあげる用意があるよという風な感じの、あのほとんど無償の愛に近いような熱意をもって。すると見よ！　そこからは、もとより時折りのことであるとは言え、心を用いて耕されているが故によく肥えた土に落ちた一粒の麦のように、すすくと伸びる好学心の強い若者が勢いよく生い育ってきて、私などそれにはその度ごとに目を見張らせられるのだった。

そう言えば、鳥居さんが書いたある文章にも瞠目させられたことがある。それはある折に、学科主任としての所感を述べられた文章のことだ。私も鳥居さんの次の学科主任を務めたので、同じような文章をつくる役割が回ってきたときに、遡って何人かの先生方の所感文を読んでみた。勿論、皆それぞれに立派な文章なのだが、そのなかでも鳥居さんの文章は異彩を放っているように見えた。無駄や冗漫が一切なく、事務的な無味乾燥は言うに及ばず、はぐらかしもごまかしも迂闊な上滑りもなく、すべてを正しく見て取って、心を集めて語っているのにもかかわらず、そのように見て考えて語っている自分自身を指す「私」という言葉がまったくどこにも、どのような形ででも現れることがないのだ。常に生きて働いているのに、決して徒らに表で出しゃばることのない「私」。正しい、*honnête* な文章とはこのようなものかと思った。その顰に倣おうと努力はしてみた。しかし私は結局は諦めた。所詮それが私の手に余る技であることは、この文章そのものが問わず語りに示している。文とは人に他ならない。鳥居さんとは常に鳥居さん、正文さんとは常に正文さんなのであった。そしてそう、あの時もまた！　私が主任として主催しなければならない学科会議を控えた朝を迎えると、鳥居さんは毎回それとなく電話をくださるのだった。既に長い学内経験を踏まえて主任の任に当たられた鳥居さんとは異なっていて、私は就任から比較的短期間で主任を任された。ようやく学科内の仕事には慣れてきていたが、学科の壁の外には一体何があるのかまったく感触が掴めていないままの主任業だったので、私は当時いつも綱渡りをしているような気持

ちで、恒常的に神経の興奮した状態に置かれていた。そのことを鳥居さんの眼はやはり見逃さなかったのだろう。そしてここでもまったく自発的・能動的に氣遣ってくださったのだと思う。こんな無償の奉仕を同僚から享受した学科構成員が果たしたそれ以前にいたのか、そしてそれ以降にいるのか、私は審らかにしない。

鳥居さんもお酒は楽しまれる。大いに楽しまれるのだが、それはいつもにこやかで快活なお酒、およそ酒に飲まれるということのないお酒である。原則的には隔週に一回ある大学の会議日の後、もともとフランス文学科では大学近辺、つまり手近な場所ということだが、お酒を楽しみつつ共に会食するという気風があった。ここで談論風発して会議日の興奮を鎮めたのである。最近はその参加者もやや細ってくる傾向があるが、この二十有余年、そのアフター・ファイブ（実際には8時をすぎること稀ではない）にはほぼ皆勤したのは、現在の学科構成員に話を限ると、鳥居さんと私、それに私の一年あとに就任した露崎さん（ここでもさん付けで許していただく）である。私たちは、その日の議題から伺える学内・学科内のあれこれの問題について、またその時々日本や世界で起こる目立った時事問題について、お互いに相手の感じ方や受け止め方、考え方を知る必要があった。私たちにとって、大抵の事柄（すべてのとは言わないが）は、その半ばくらいまでが、その事柄について私たちはどう考えるのかという思想の問題であったからだ。それに何よりも相手の研究領域についてのお話を伺えるという強いスパイスのような楽しみがある。フランス文学科とは切り離しても、こうした席はこれからも時折はもたせていただきたいものだ。もう学内情勢の話などはする必要がない。しかしそのかわりに、鳥居さんが大切にしていらっしゃるラテン語の詩や、プラトンなどのギリシャ語のテクストの話などが増えてくれば、私たちにとってのポスト・フランス文学科時代の、典雅な微醺に香る清談が楽しめるに違いない。